

元 気 お に ぎ り

さいたま市立辻小学校 四年
上 崎 凌

去年、お母さんが病気で寝込んだ時、我が家は大変だった。

いつもなら、僕が朝起きた時には朝ご飯が出来ているのに、その日はお父さんが僕と妹を起こしに来た。

「今朝はお母さんは体調悪いから、お父さんが朝ご飯を準備するから凌も手伝って。」

食卓には、まだご飯が並んでいない。

「凌達は、それぞれ玉子焼きを焼いてね。」

と言われて、僕と妹は自分の玉子焼きを焼いた。お母さんに教わった、塩で味付けをした玉子焼き。

いつもとはちよつと違う朝ご飯。お父さんが作ってくれた大根のおみそ汁に、自分で焼いた玉子焼き。

そしてほかほかの白米。確かに美味しいけれど、何か物足りない。なんでだろう？

なんでいつもと違うのかがすぐ判った。お母さんも一緒に食べてないからだ。

お母さんは、ずっと寝ていて、食欲がない様子だった。すると妹が

「お母さんにおにぎりを作ろうよ。」

と、言ってきた。お父さんも、

「そうだね。おにぎりなら入るかもね。」

とうなずいて、三人でお母さんにおにぎりをにぎることになった。

熱々のご飯でおにぎりをにぎるのは、本当に大変だ。ラップを通してご飯が熱すぎてうまくにぎれな

い。やけどしそうな位熱い。

するとお父さんが、

「お茶碗を使ってにぎると熱くないよ。」

と、教えてくれた。なるほど、お茶碗の中でごはんを転がすと全然熱くない。僕も、妹も

「お父さん、何でも知ってるんだねえ。」

と感心しながらおにぎりをにぎった。

そうして三つのおにぎりが出来上がった。一番小さいのが妹の塩おにぎり。僕のおにぎりはそれより少し大きいのり巻きおにぎり。お父さんのは、梅干しの入ったおにぎり。どれも、お母さんがいつもにぎってくれるおにぎりに比べれば、形がちよつと変だ。

お母さんは

「こんなに美味しいおにぎりは初めてだよ。とっても美味しいよ。」

「凌やりせの優しい気持ち一杯入っているから、お母さん、元気が湧いてくるよ。」

と言つて、嬉しそうに食べてくれた。一つ、二つと、おにぎりを食べる毎にお母さんは元気になってきた。

僕も、妹も、お父さんもとて嬉しくて笑顔になった。それまでの不安な気持ちはどこかに行ってしまった。

きつとこのおにぎりは、「お母さんが早く元気になりますように」という気持ち詰まっついていて、それがお母さんに届いたのだ。食べてくれる人に元気と笑顔を届けてくれる元気おにぎりなのだ。これからも僕はこの元気おにぎりでたくさんの人を元気に、笑顔にしたいと思う。